

感話

R.K.

「みんなにとってこのクラスは外ですか？内ですか？」
これは四年生の時の国語の時間に先生が問いかけた言葉です。当時のクラスを内だと答えた人が大半で、外だと答えたのは私を含め数人。私の感覚では、家から一步出たら、身体的にも精神的にも外であり、どんなに仲の良い友人でも、やっぱり他人でした。そうであるのに、多くの人はこのクラスを内だと感じて適度にくつろいでいるということを知った時はとても衝撃を受けたのを今でも覚えています。その頃から、私は自分を身体的にではなく精神的に内と外に仕切っているものについて考えるようになりました。

今年の修養会のテーマは『扉』。扉というものは、窓とは違って人が通るものであり、空間を内と外とに分けるものである。この扉というテーマの解釈を聞いた時、自分が四年生の頃から考えていたことに重なっていることを人知れず思いました。

グループに分かれてのディスカッションの中で扉について話し合った時、自分で開けた扉は何であったか、という話になりました。私がこじ開けた扉はこの18年間の人生の中で一度しかありません。それは自分の所属していた部活の部長になることでした。三年生の終わりから四年生の間、私は部長になりたくて仕方がなくて、多くの人を傷つけ、その座を奪い取りました。自分には音楽

的センスは皆無だけれど、オケ（オーケストラ）を変えたい、同輩や後輩みんなの一つのオケを作り上げたいという気持ちでどうにか部長の座にたどり着いたのです。けれども、70人もの部員をまとめるのは予想以上に大変でした。何より大変だったのは、同輩をまとめることです。私の同輩は個性的な人が多く、みんなでいると楽しくなくなって周りを見ることができなくなってしまう傾向がありました。演奏にはとても熱心で、それぞれでどうすれば部活がよくなるか、自身のパートがよくなるか、考えていたのはよく伝わってきました。しかし各々でよく考えていても、20人弱同学年がいるために、一人一人の意見が必ず採用され、実現するということはありません。私は自分だけのオケでなく、みんなのオケにするという目標を公約に掲げていたので、それぞれの意見を汲み取ろうと思いましたが、それはとても難しく、また後輩がわざわざ意見を言ってくれても、うまく反映できず、いつも申し訳なく思っていました。そんな公約を果たしきれない私を見て、意見を言っても無駄だと思ったのでしょうか。次第に私が出した練習案に誰も何も言わなくなりました。私は、何かあるならば言って欲しいと思い、言葉にもしましたが、皆は特になんかという反応を示したのです。他の部活の友人がそれぞれ意見を言い合って部活やお互いを高め合っているのを見るにつけ、私は口論や自分の非を責められるのは苦手でしたが、それで部活がよくなるのならば、不満に思う点があれば言っ

て欲しいし、自分からも言いたいと考えていました。ですから、演奏面だけでなく生活面でも後輩の手本になれるように行動を考え直して欲しい、そして私の意見に不満があるのならば直接言ってほしいと勇気を出して直接伝えたことが一度だけあります。けれどさらっとかわされてしまいました。それだけならまだしも、私のいないところで不満を言っているのを偶然聞いてしまいました。そのことがあって、人と本音でぶつかりあうことを以前以上に恐ろしく感じてしまうようになってしまいました。気がつけば、わたしは皆との間にある扉を固く閉め、なるべく衝突しないような当たり障りの無い言葉ばかり並べてしまっていたのです。

この苦い思い出を大まかにではありましたが、修養会の最終日のクラスでの感想会で思い切って吐露した時、皆が私の話に耳を傾けてくれて、涙を流してくれる人も中にはいたことを知って、私は少し救われた思いがしたことを覚えています。

家に帰って、修養会で考えたことを反芻して感想をしておりに書いていた時に感じた気持ちは不思議でした。感想会の時同様、本当は心細くて仕方がなかったことや、自分がうまく同輩と付き合っていけなかったことを思い出して涙を流しましたが、この時は名状し難い温かさを心に感じました。そしてこれはどうしてなのだろうか、と悶々とし始めました。

考えを巡らしていくと、感想会の後、友人と気持ちを

共有した時に少し誇らしく感じていたのを思い出し、私はただ自己満足しているだけなのではないか、と思うようになりました。わたしには自分の本心を誰かに話し、その上理解された経験がほとんどなかったので、自分の思っていることを吐露するという行為を少し独りよがりだと感じていました。だから自己満足だと感じてしまったのです。しかし、あの時の私の行為がもし独りよがりだったならば、果たして私の話を聞いてクラスの皆は涙を流すのでしょうか。少なくとも私はクラスメイトの本音を聞いたことで絆が深まったように感じましたし、感想会の後にも気持ちを共有したということは、その人たちも私と同じような気持ちを抱いていたからできたことだと思います。気持ちを共有した時に誇らしげに感じてしまったのは、おそらく、私が固く閉ざした扉を、勇気を出して少し開いたからでしょう。そして、自分が話したことを、自分のことでもないのに泣いてくれた人がたくさんいて、自分も他の人の話で涙したあの空間が、あの雰囲気が嬉しかったからかもしれません。みんなが自分の話にちゃんと耳を傾けてくれて、その人なりに理解してくれた事実が嬉しくて暖かい気持ちになったのです。

心を自分から開かなくてはこの関係性は作れません。自分の心の扉を閉めて、ずっと内にいてはならないのです。私の例にしても、四年間で培った関係性を信じればよかったのに、自分の弱さ故に信じることができずに心を閉ざしてしまい、気がつけば誰にも頼ることができ

なくなり、無理矢理同輩が私に対して思っていることに気がつかないようにしていました。本当は相手を理解したい、そして相手に理解されたいと思っていたのにもかかわらず、必要以上に保身してしまっていたのです。言うならば、本当は気になって仕方のない皆に対して無理矢理無関心になろうとしていたのかもしれませんが。

「相手を憎むことよりも無関心は残酷な行為だ。」という人がいるほど、無関心というのは恐ろしいものです。お互い思いあってすれ違えば、お互いが相手に対して無関心であるならば、何かが生まれたり、深まったりすることはありません。どちらかが心の扉を開かなければ何も事態は変わらないのです。思い切って行動に移さなければ、お互いが平行線上にいるように、交わることが決してありません。しかし勇気を出して扉を少し開くだけで、内と外という異なる空間に交流が生まれ、何かが変わるかもしれないのです。これは人と人の関係だけでなく、国と国の関係にも言えることではないでしょうか。自国に関する利益や名誉に拘束され、相手の国が受ける被害に関心を向けることができなかつたために、侵略や戦争が起こり、多くの人が苦しみました。少しでも相手国の被害に関心があれば起こることの無かつた戦争が必ずあつたはずですが。私はと言うと、固く閉ざしていた扉を修養会以後開き始めています。以前は話すことも億劫だと思つてしまうこともありましたが、今では人と話すことが好きになり、少しずつではありますが、今

まで扉を閉ざして隠してきた本当の自分というものを
出せるようになってきたと感じるとともに、以前は身体的
にも精神的にも外だと感じていたクラスや恵泉を安心で
きる空間として感じてはじめています。

長々述べてきましたが、様々な物事に悩み考えるこの
時期をこの学校で過ごすことができたことで、私は大き
く変わりました。決して楽しいことばかりではありません
でしたが、恵泉での六年間の中で経験したことや考え
たことが、これから生きてゆく中で指針となり、私を助
けてくれることは間違いない、そう確信しています。